

のだ (ibid. p.321)。実際、その翌年である〇六年はじめのパレスチナ総選挙でハマースが勝利するこ
ととなる。

5 「もしガザが陥落すれば……」の文脈

そして最後に、本書第一部第一章に収録した「もしガザが陥落すれば……」の文脈を紹介しておく。
先にも述べたように、この文章は、昨年末のイスラエルによるガザ攻撃開始のわずか一週間ほど前に
書かれたものだ。ウェブ掲載されたもので二〇〇八年一月二六日という日付が確認できるが、それ
は空爆開始の前日にあたる。

「ガザ撤退」政策以降の流れを再確認すると、この政策が「一方的」であったことがいっそうパレ
スチナ自治政府の存在意義を薄めてしまい、結果として〇六年一月のパレスチナ総選挙でのハマース
勝利につながっている。国際監視団の入った公正な民主的選挙による政権交代であったにもかかわらず、
即座にイスラエルと欧米諸国と日本は、ハマース政権のポイコットを決め、圧力によってハマ
ースを屈服させようとし対決姿勢を強めた。封鎖の度合いはさらに強まり、集団懲罰とばかりに日常生
活品や基本的食糧までが〇六年からすでに制限されはじめ、〇八年一月からは医療品や援助品も含め

て全面的に物資搬入を禁止した。同月末にはついにガザ地区の各組織が協力してエジプト側の壁を爆
破し、大量の住民が一斉にエジプト側に流入し食糧の買い出しに走るという前代未聞の事態が発生し、
累計で七〇万人以上の住民が一時的に越境したとみられている。すなわち、ガザ地区はこの時点で限
界を突破した極限状況に陥っていたわけだ。

そのほかにも、イスラエルは〇六年と〇七年を通して、ガザ地区への軍事侵攻、超法規的暗殺作戦
を継続し、それにとまなう一般住民の巻き添えの死傷者を大規模に発生させていた。またイスラエル
とアメリカは選挙に敗れたファタハ側に公然と武器や資金を供与し、ハマースと衝突するように促し
た結果、両陣営による内紛は凄惨なものとなり、その死傷者の数はイスラエル軍による攻撃にも匹敵
する規模になった。

総じて、「ガザ撤退」とハマース政権誕生以降のガザ地区は、三年ほどのあいだ、上記のような包
囲攻撃状態におかれていた。そしてロイが「もしガザが陥落すれば……」で触れたような〇八年の状
況へと至る。

これまで見てきたように、ロイの発言は、つねにそのタイミングと適確さにおいて際立っており、
一研究者としての自負を超える責務を果たしているように見える。すなわち、日本の研究者も含めて
多くの中東研究者たちが、ガザ撤退以降の状況に沈黙してきたためにロイの発言が突出していたのだ。
多くの研究者たちは分析能力に欠けるのか倫理に欠けるのか、あるいは政治的になることを避けてい

岡真理 + 小田切拓 + 早尾貴紀 編訳

サラ・ロイ Sara Roy

ホロコースト から ガザへ

パレスチナの政治経済学



戸塚 ☎862-9411

横浜市立図書館



2043764252

青土社